

---

# 幻獣ばれっと!

橘 猫音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幻獣ぱれっと！

### 【NZコード】

NZ859Z

### 【作者名】

橘 猫音

### 【あらすじ】

彼の住む北ファイセクト大陸には、いや、正確には彼の住む世界には、「魔物」が住む。魔物の種類は人間に有害な「境獣」と人間に無害な「幻獣」に分けられる。境獣に対抗する為に完成させられた技術、「境獣転生」で転生させられ、人になつた獣は人にとって奴隸にするのに都合が良く、やがて人間たちは「幻獣」までもをその的にするようになる。

身近で転生した幻獣が奴隸として働かされている。そんな光景に耐え切れなくなつた男が、行動に出る。

## 序章・俺が今から始める事は

…見ていて気分を害す

幼い女の子にムチを振るい、田を耕させているのだろうか、労働を強いらせている30代後半の男が家から見える。

息をきらしながら田を耕す麻布の服の少女の頭には犬のミミが付いている

察するに彼女はメフィストの転生人種だろう

ここ北ファイセクト大陸には、いや、正確にはこの世界には魔物がいる。

魔物と言つても多くの人が想像するだらうス イムやド キー（には同じ言葉が入る）みたいな人を襲うようなことしか頭にない野蛮な生物のことではない。

「幻獣」と呼べば思い浮かぶだろうか？

そう、神話に出てくる「ユニコーン」とか「ペガサス」とかそういう類いの動物だ。

幻獣は変異種も含め、1360種以上の種族がいる。

幻獣たちは決して人の手の加わった土地には決して踏み込まない。これは古くからの人間と幻獣の暗黙の了解だった。

そう、幻獣たちは決して踏み込まない。

だが、1360種もの幻獣とは別に分類される、人間に害を与える獸、そう、それこそスイムやドキーみたいな獸、「境獣」がいる。

境獣は幻獣たちのおよそ三分の一ていど480種程度の種族しか居ないが、大きな魔力、物理的な力を持つ境獣は一匹でも人間の大好きな驚異になる。

幻獣も境獣も勿論「獸」だ。どちらも人間とは姿も言葉（多くの獸は鳴き声、テレパシーである。また、ワルキューなど一部例外もいる）も違う。

君には「なら何故さつきの犬ミミ少女は人間の少女の姿をしていたのだろう」という疑問が残るだろう。

詳しく述べば長くなるだろうから手短に話していくと思つ。

十数年前に、ロイルマナレスト大学幻獣学部の教授、ウェルト＝ダイルが、境獣を殺さずに安全化する為の方法として「境獣転生」の方陣を完成させた。

境獣転生とは、簡単にいふとなんだ、境獣を人間にしちまおうつて呪文だ。

まあ長年の研究で境獣の魔力や力学的エネルギー、容姿の特長を完全に封印することは出来ないことは解つたらしいが。

手順も簡単に説明しようと思つ。

まずは境獣の魔力を弱らせなんらかの方法で転生方陣の中心に誘導、移動一（ヴァジュラなど一部の大きすぎる境獣の場合は対象を中心の方陣を書く場合もある）させる。

その後拘束魔法を唱え、境獣を拘束し、転生魔術を唱え、方陣からドーム形に白い光が出て、暫く鳴き声や喘ぎ声、他にも色々聞こえるが、3分後には光も消え、方陣の中心には人間が倒れている、とそんな感じだ。

この方法で「人」になつた境獣は魔力に限界があり、一定ベクトルのエネルギーを越えると、動けなくなつてしまつ。つまり、人間に逆らうことができない、人間より弱く見られる彼らは劣性人種となされ、奴隸として労働を強いられる。

そこで色んな大陸のお偉いさんが考えたわけだ

「転生人種は力も強く、労働に使えるぜ、でも転生にはリスクがない、どーにか簡単に確保出来ないか」

つてな

んで此処からがご都合主義本番な展開だ。

某年のある日、親とはぐれ、町に迷い込んだ子供のクリウス（熊に似た幻獣）がパニックになり、暴れている所に転生術士が通りかかって転生魔術をかけたら、くまのフードコートを着た女の子が出来たっていうニュースが流れた。

そんな事件があつたもんで大陸間協議なんかがあつて、激論の末、

森に立ち入つて幻獣も人間にして奴隸にしまおうって計画が出来た。

そんなこんなで…いまの現状がある。

考えただけでイライラする。

そこで幻獣学部卒の俺が動かない訳にはいかないだろ？ て事で、ちょっとばかり行動にでることにした。

そう、保護団体に入る事にした。

今ちやっちはなつて思つた？

ちやつちくなんかない。俺が入る幻獣保護団体は…

転生人種入団可能の特殊ギルドだ。

おつと、もうこんな時間か、ギルドのある町までの出発は明日。

詳しきは明日歩きながら話す事にしよう。

## 移動中・俺と黒猫の話

ガチャリ

鍵もかけた…っと

暫くはここには帰つてこないから、締まりはしつかり…っと

わ…今は早朝三時、まだ日も昇つてない、寒くて凍え死にそうだ…

だが今でなければ今日中に町まで到着出来ない。

さて…それではさりば懷かしの我が家よ。

荷物は最小限に抑えたから足取りも軽い。

そういえば昨日、ギルドについて詳しく話をうと聞いた。  
な。

今田はどうせ歩くだけだ。少し詳しく話をうと聞いた。

俺が今から行こうとしている町、ルーザンマードルは、カヌ村  
から約徒步1~2時間の所にある。

ルーザンマードルは市場や最高クラスのレストラン、服屋など、商  
業が盛んで、観光でも人気のある町だ。

だが、俺は勿論、美味しい料理を食べたり、お洒落をするためにわざわざ行く訳じゃない（ちょっと観光もしようと思つてるのは秘密

だ)。

俺がルーザンマードルに行くのは「ギャザリングギルド ルーザンマードル支部」に所属する為に申請を出しに行くのだ。

ギルドについては、境獸の討伐依頼、転生依頼などを受け持つ町営施設だ。

転生が嫌いだつて昨日言つてたじやないかと思つ人も多いだろつ。

ただギルドに所属したいだけなら、自分の村にもある。

だが、大抵のギルドは転生依頼を受け、境獸の転生を行つた後の境獸人種は、奴隸として競りにだす。

更に、お偉いさんからの「幻獸を5～6匹転生して売つてくれ」という不正な依頼すら普通に受ける。

俺の村でもそうだつた。

だがルーザンマードルのギルドは違う。怪我をした幻獸を保護、必要に応じて転生し、転生させた幻獸はルーザンマードルの住民として登録し、保護している。

さらに境獸の討伐依頼は一切受け付けず、境獸はすべて転生し、住民登録を行う。

更に、普通のギルドには転生人種の入団は許可されない。

だが、ルーザンマードル支部は、転生人種もギルドへの受け入れを

許可し、依頼を『えている。

そのうえ、転生人種保護条例を作り、通常人種と対等の生活を約束している。

しかもギルドの受付はレッドドラゴン種（超ド級の幻獣）から転生した、龍の羽の残っている朱い髪の綺麗なお姉さんが担当しているそうだ（決してそれが目的ではない）。

他の地域から奴隸から解放されるため、亡命してきた転生人種に対しても受け入れ体制をとつて、生活を保護している。

最高じやないか、ルーザンマードル。俺もルーザンマードルのギルドで…

つて…ん？ なにか… なんだ？

なにか黒い、黒い…布か？ なにやら異質な物が草むらにて落ちて（ ？ ）いる。

小型の魔式ナイフをとりだして近付く。

一歩… 一歩…

黒い物体を上から見下ろす。

黒い猫の体に 黒い猫//ミ 黒い猫の尻尾が2本…

「なんだあ…布じやなくてケット・シー（猫の小型幻獣）かあ… つてええ！？」

思わず声を出して自分にシラッコんでしまった。

倒れてる？…し…死んでるのか…？　おーい…って声かけても解らないか…

そりが…せめて埋めてあげるか…

持ち上げようと手がケット・シーに触れたとき

「ハラ…」

「いつ…生きてる？…急いで…マード…　あー　モード！」

「神よー！」の者の命吸きのせ余りにも早いとお想こになるのならば力を貸してまえー！」

ヒールの呪文が発動し、ケット・シーを澄んだエメラルドグリーンの帯状の光が取り巻く。

良かつた…成功だ。

「にえ…」

取り合えずのケット・シーはギルドまで連れていこう。

振動を「えなこ」のケット・シーはギルドまで連れていこう。

いやあ…おやか行き道で幻獣を保護するとわなあ

などと考えながら、森に差し掛かる前までもきた。

幻獣を保護した達成感に浸りながらケット・シーを見た。

「それにしてかのケット・シーよく眠りてゐなあ……つてええーー。」

思わず声をあげてしまった。

俺は気付いたら、11歳位のネコ//の付いてこむ、黒いワンピースを着た幼い黒髪の白いのは肌位だらう、そんな姿の女の子をお姫様だっこしていた。

しかも田を擦つて……お田覚め真つ最中の……

「ふああ……いやあ……！」

固まる俺　じうすればいい。　なんでだ？　俺は転生魔術なんてかけてないぞ？

「ここ？　なこ？　れ、いやあ、下ろしてよー。」

腕の中でじたばたする女の子　固まる俺　じゃなくて

「あつ　『メソ』」

慌てて地面に下ろす俺。

「お兄さんのがここまで連れてきてくれたのかこち？」

取つ合えず訳を話す。聞きたいことは沢山あるが、質問はそれか

うだな。

「ああ、うそ、ルーザンマードルまで行く途中に（以下略）」

ヒールを使ったこと、拾った時の状況 みんな話した。

「なるほど、いやあ、お兄さんは命の恩人だね！ ありがとござ  
あお兄さん」

可愛い… 可愛い… トイカンイカン質問を忘れる所だった。  
む、誰だ口リコンだつて言つた奴は！

まあは… 」の質問からかな…。

「とにかく… お嬢ちゃん、ケット・シーが倒れてると黙つていらっか  
で連れてきたんだけど、なんでその格好に成ったの？」

ケット・シーの女の子は顔を伏せ、ふえ… くすん… とこつて目を  
潤ませる。

し、しまつた… 地雷を踏んだか？ まずは質問を変える。名前  
は？ 身長は？ なんでもいいから早く変えるんだ！

「じや… じやあ、お嬢ちゃん、どうなぱんつ履いてるの？」

墓穴を掘った。焦った俺の口からとつせに出た質問は「どうなぱん  
つ履いてるの？」だった。ああ… 終わった…

女の子が口を開く ああ… 叫ぶのかなあ… 俺は逮捕かなあ… 南無  
三… 運が悪かった…

「今日は私はんつ履いてないの…えへへ…」

「へ…?」

なにが起きたか解らず、ぽかんとしていると、ほら…と言ひてネコミミの女の子はワンピースのスカートを捲り…涙目で微笑み、スカートを捲る姿は…これじゃあ俺が幼女をなんかのプレイで虜めるみたいじゃないか。これはこれで…興奮する…！ ジゃなくて困る。誰だ、「このロリコンが！ その娘に触るな！」とか言った奴は。失礼な。

「解った！ 解ったからーーまずスカートを下ろしてーー！」

ずっと涙目でスカートを捲っている幼女を見ている訳にもいかないのでスカートを下ろさせる。

「う、うん…解った。」

といい、スカートを下ろす。まず…なんだ…えっと…この娘ももう大丈夫みたいだ。これ以上に鬱わつたらうくな事がないきがする。

「じゃあ、大丈夫みたいだし、俺はそろそろで行くけど…お嬢ちゃん、家まで一人で帰れるよね？」

じゃあね、といい、歩き始める。

だが…俺をあの娘が お兄さん…と呼び止める。

「お兄さん…以外と冷たいんだね…」

ぐつ… 時間がヤバいんだが…しかし流石に罪悪感が募る。

「じゃ…じゃあ…お家まで送つていいく?」

「ねえ、お兄さん、ルーザンマーデルまで行くんでしょ?なら私も一緒に連れてってよ…?」

なにを言い出すんだこの娘は、一人で亡命したならそれは認められる。だが、俺がつれてきたと成れば…本来の彼女の主人に拉致罪で訴えられれば俺はギルドに所属出来ない。それこそ終わりだ。

「お、お嬢ちゃん?でも突然居なくなつたらお家の人心配するよ?」

この娘は転生人類だ、奴隸として扱われる彼女を心配する人なんて… だが、なんとか回避しなければ。

「心配なんてしないよ…家族とはもう…もう会えないから…」

「…え?」

『もう会えない』この娘の言ったこの言葉には、「奴隸の私を心配する人は居ない」という意味は込められて居ないようだつた。それには純粋に、「家族に会えない哀しみ」の気持ちしか入つて居ないよつに感じられた。

「うん…さつきお兄さん、なんで私が人になつたか…不思議がつてたでしょ? 話せば信じてくれるかも…辛いけど…話すね」

彼女はうつむかず、涙を堪えて話し始めた。

「私はね、半転生異常種なの」

半転生異常種 それはたしか、バハムートとか魔力がとてつもなく  
を魔力が削りきれずに転生させたときに稀にできる、魔獸と人を自  
由に行き来できる、いわゆる「転生失敗」で出来る墜天種だつたは  
ず。

「私はね、ルク村の近くで転生魔術を受けたの、その時に、魔術士  
の人はめんどくさいからって私ともう一匹、2匹まとめて魔術をか  
けちゃったの。それで魔力の合計に足りなくて失敗して、私は半転  
生異常種になっちゃったの。使えないからって、人間からは捨てら  
れて、森に帰つたら、転生魔術を受けたからって民族からも追放さ  
れたの。だから私は『失敗作』になつたせいで家族とももう会えな  
い…ふえっ…」

そこまで言つて話しあえた彼女は泣き出してしまつた。

はたしてルーザンマードルで半魔（半転生異常種）の転生人種を受  
け入れてくれるかは解らない、でも…だとしても

「解つた。一緒に行こう。お嬢ちゃんを一人にしない、約束する。  
ちゃんと守るから。」

どちらにせよ、弱者を見捨てるような男にどちらこしろギルドに入  
る資格はない。 彼女の頭を撫で、誓いをたてる。

「…ほんと?」

顔を上げた彼女と田があつ。

「ああほんとだ。やあ、一緒にに行ひへ。」

手を差し出し、彼女を立たせる。

「お兄さん……にやあ……有り難う……えへへ……やつぱはつお兄さん……いー人だつたね……」

彼女は涙拭い、微笑み、立ち上がり、「わ、お兄さん、いーひ」と言い、歩きだす。

おひ、と反応し、小走りに追いかける。

横に並んで、歩く二人を、優しい木漏れ日が照りしていた。

## 移動中・碧髪の巨肺と大蛇の話

彼女と色々な事を話しながら歩いた森を抜けた頃には、延々と続く彼女の問答のお陰もあって、俺も彼女もお互いの事を大分理解していた。

話しによると彼女の名前は人間の言葉に直すと「悠（果てしない、ゆっくりした）」という意味の言葉らしい。本名も名乗つて貰ったが、難しくて覚えられそうにない。確か「ルティアメルラ…なんちやら」だった気がする。まあ到底覚えられないから、俺は彼女の事は「ゴー（ゅう）」とよぶことにした。

ゴーに俺の名前を教えたところ、必死に俺のあだ名を考えたあげく、結局名前の一部を取り「シユウにい」と呼ぶことにしたらしい。やはりある程度転生後の見た目に年齢は関係あるらしく（1億2000万年生きた魔物境獣が妖艶なお姉さんに転生したこともある、そこら辺は謎なのだが）、彼女の年齢は動物年齢にして1・7歳、人間年齢にして11歳、だそうだ。

更に、人間と幻獣の姿はある程度、自由に行き来出来る事も解った。そういうえば、子供の頃は周りの人からは「シユウちゃん」なんてて呼ばれてたなあ、なんてしみじみとしている

「シユウにい！ にやあ！ 街だよ街！ おつきい街がみえるよー。」

ゴーが言った。

確かに3kmほど離れた所の草原の真ん中に低い壁に囲まれた街の

よつなものが見える。

「今は…夜の10時か。以外と早く着いて良かったな、ユー」

「うん… シュウにい速く！ 遅いよ！」

いつの間にか黒猫の姿になり、ぴょんぴょん跳ねながらかなりのスピードで走るユー

「走るなよ、転んでもしらねーぞ？ …！ ユー！ あれは… あッ…あぶねえ！ 止まれ！」

「へへーん なにも無いといひで転ぶほどバカじやないよー」

ああ、遅かったか

後ろを見ながら走っていたユーは… 前が見えず不意に野生のボーテイス（巨大な蛇の境獣）にぶつかり、思わず衝撃によりユーは黒猫から、少女の姿に変わる。

ボーテイスは猛毒のキバを持つ大蛇の境獣だ。それこそ…ケット・シーなどキバに触れるだけで死んでしまうよつな。

「逃げろー 速く逃げるんだ！」

しかし、ユーが動くよりも速く、ユーは尻尾を巻かれ、締め上げられる。

「しゅ… シュウにいッ… へあつ…」

ユーが苦しそうな声で俺に助けを求める。俺は魔式ナイフをとりだし、拘束術を唱えようとする、だが、遅かつた。

「ユー——ツ！！」

俺は叫ぶことしか出来ない。

ボーイスは思わず獲物に、毒の滴るキバをむき、少女の姿になつたユーに巨大なキバを振り下ろし、キバがユーを貫く。

守れなかつた…目を瞑る。キバがユーを…貫く。いや、貫くはずだつた。

カカカカカンッ その時軽やかな音がした。俺が目を開けた頃にはボーイスの固い鱗に何本もの術式矢（一定時間すると消える矢）が刺さつている。

キュイイツと甲高い声で鳴き、ボーイスがグネグネと動き、ユーは尻尾から放り出され、地面に叩きつけられる。

それとほぼ同時に太いボーイスの胴体の反対側の少し離れた場所から「向こう側の貴方！速くその娘を連れてこっちに！」と、凛とした女性の声が聞こえる。

何が起きたか解らず固まる俺。いや、今は考へてゐる暇はない！！一気に飛び出し、俺の方に逃げてこようとするユーを抱き上げ、止まらず声のした方に走りだす。

人を抱き抱えたまま最も速く走れる格好、自分の足下だけを見て、前傾姿勢で走り続ける。

13秒程度走った所で人の影を前に確認し、止まる。

「はあっ…はあ… 助かりました… ありが…！？」

声の主をみて、述べている礼が一瞬止まる。

私を助けてくれたのは、「緑色のしなやかな髪の、揉み上げと後ろ髪を長く伸ばした、背中にエメラルドグリーンの身の丈程の大きさの翼を持つワイルドチャーム（緑とカーキの『士用の服』）を着た、銀の装飾の施されている『』を持つ、端麗な『美女』」だつた。まあ正確に言えば俺を助けたのは彼女率いる魔法『士団』なのだが。

「礼は良いですから、速く結界の外に出てください。」「

俺の足に『』先をむけ、美女が言つ。気付かなかつた、ハツとして見ると、いつの間にかボーテイスを中心に転生方陣が描かれ、ボーテイスには拘束術により発生した鎖が絡み付き、動きを封じている。ハツとして方陣から出る。

「それでおーけーです。では、コホン、神よ、哀れな獣に新たな身体と精神の反転を『』えよ！」

美女が呪文を唱える。その瞬間、転生方陣の縁からマーカーグリーンの光がドーム型に広がり、ボーテイスを囲つ。

ん？なんだろ？この違和感…

光…そうだ、出ている光の色だ。普通の転生方陣から出る光は普通の光だつた。それに…この転生、鳴き声も喘ぎ声もその他色々も聞

こえない。

結局、何故なのが3分間考え通したが、結論にまでたどり着かなかつた。

光が消え、方陣の中に倒れている人の姿が見える。

方陣の中心には、薄紫色のセミショートの髪の、鎧を着た、やや背の低い妖艶な女性が海賊の持つよつやな剣を持って俯せで倒れていた。

「さあ皆さん、お仕事お疲れ様でした。大物を仕留めたのですから街に帰つて…今夜は飲みましょう」

美女の呼び掛けに

「いいねえ！ 今夜は飲み明かそうぜー！」

「姉さん（あねさん）が行くなら俺も行くぜー！」

「お疲れえー！今日は美味しい酒が飲めそうだ！」

弓士団の面々がそれぞれ別々にいつ。

「それから、転生させた娘はギルドまで馬車で運んでおいて下さい。

」

そういうルーザンマードルの方向を向き、歩き出やうとする美女を引き留める。

「あつ…あの… やつはこいつの事…助けて頂いてありがとう御

座りました。」

美女は礼には及びませんよ。とこゝで歩きだす。

「あつ…あの、貴女はルーザンマードルのギルド所属の方ですよね?  
話しかけて貰えませんか?」

更に引き留めた、が

「もし断つたら?」

真顔で放たれたその台詞に俺は、う…と息詰まる。

「ふふつ…冗談ですよ、貴方はルーザンマードルのギルドに所属するため、移動していたのですか?付いてきて下さい。歩きながら話しましょつ。」

ふふつ…と笑つた美女に、はつ…はいー…と言つて俺はユーを抱いたまま弓士団の中に交ざり、ルーザンマードルまでの道、俺は歩きながら、緑髪の彼女と話し始めた。

## 移動中…「小食マンティニアなお姉さん」と半口口裏想

「…私の自己紹介は以上です。」

取り合えず名前を聞いてみると、碧色の美女は「…寧に自己紹介をしてくれた。彼女は、ルーザンマードル所属の2転生小隊隊長。名前は「雲村鳴葉」と言うのだそうだ。ちなみに趣味はお菓子作りだそう。美人だし、料理も出来る…なんていうか…嫁にとりたい。勿論冗談だ、半分くらいは。

「非常に言ひにくのですが、私はまだ貴方の名前すらまだ聞いていないのですが。」

遠慮など微塵もしていない様子の彼女の台詞。そういうえば、俺の方はまだ名前も名乗つて無かつたな。

「あ…聞きましたね、すいません。」

許します と鳴葉さん。

「有難うございます…。俺は」

「…やあ、シユウにいっていこうんだよ~」

いつの間にか、すっかり目を覚ましていたユーが俺の腕の中で楽しそうに笑つていう。ちょっと待て

「いや…俺の名前は」

「成る程、『こ』は『兄』の意ですね。では私はショウガさんと呼ぶ事にしましょ。」

遮られた。俺の嫁……じゃなくて鳴葉さんの中で俺の名前はショウウで認識されてしまったようだ。

「はあ……あの、鳴葉さん。俺の事は呼び捨てで構いませんから。」

「それでは遠慮なく。それではショウウ、あらためて宜しくお願ひします。」

なんだらか……なんていふか、「ショウウ」がどんどん周りに漫透していく。まあいいか…

「それよりも、過去に踏み入るようで失礼かもしだせませんが、そこ  
の黒いお嬢さん、察するに血の繋がつた妹さんでは無いのですが  
…お一人はどのよつな関係で？」

「いやあ、私はショウウにすぐれ…」

下手な事を言われては困る。「すぐそこの拾われた」と言おうと  
開いたゴーの口に手を被せる。モゴモゴと何かいい、じたばた腕の中  
で暴れるゴー。元幻獣とはいえ一歳の女の子。一歳に負ける  
俺ではない。暴れるゴーを取り押さえたまま

「ゴーとは昔色々ありまして、まあゴーは俺の義理の妹みたいなものですよ。」

在り来たりな台詞だったがなんとか誤魔化せた気がするぜ

「その『色々』が聞きたいのですが…まあいいでしょ。それともう一つ。失礼な話かもしませんが、その黒いお嬢さんは、半魔ですね。」

「半魔の何がツ…！…！」

半魔の何が悪いんだ、そつぽっぽうとする俺を

「シユウにい、いいんだよ。ねえ、碧のお姉さん。半魔は街には入れないの？ 街には住めないことになってるのかな？ もしそうなら私もシユウにいも街には入らない。シユウにいは守ってくれるって誓つてくれたから。」

至つて冷静な態度で制止するユー。だが言葉一つ一つに感情を込め、ユーが言つ。鳴葉さんは、俺の大声に、驚きを顔に出したが、すぐにつまらぬ冷静な顔に戻り、言つ。

「先ほどの失礼な質問お許しください。本当に。ルーザンマーモードルでは勿論半魔の方も入街、移住できますので安心を。」

「うん、良かった。碧のお姉さん。」

一人の冷静なやり取りに、俺も我に帰る。

「あ、こちらこそ、取り乱してしまい、みつともない所をお見せして、すいませんでした。」

取り合えず謝る俺、許します、と鳴葉さん。こんなシリアルな場面で「許します」などと言つ鳴葉さん。はあ…ちょっとばかり調きょ…いや、再教育の必要が…（笑）

くへへ…と妄想を膨らませていると、

「ところで鶴のお姉さん、みたといふ…っていうか明らかに転生人種だよね？ 元々はなんだつたの？」

ニヤニヤしている俺を完全にスルーして、いつもの楽しそうな笑顔に戻り、ユーが言う。はあ、ユーもこのタイミングで転生の話を持ち出すとは…本当に空気の読めない奴ばかりだな。そんな悪い娘は一人まとめてお仕置きだ。

くへへ…とニヤニヤしている俺を見事にスルーして鳴葉さんが答える。

「はあ…いつかは来ると思つてましたけど、その質問にはあんまり答えたく無いのですよ。」

「うそ、そつか。で？」

今日のユーは微塵も容赦が無い。はあ…とため息をつき、俺の玩具…いや、鳴葉さんが話し始める。

「実は私…マンティコア（ライオンの頭に鷹の爪、猛毒性のあるサソリの尾を持つ魔獸）の転生種なんですよ。」

「へ？ なんで話したくないんですか？ 確かにマンティコアは獰猛なイメージはありますけど…」

純粹に理由が知りたいので質問する。この話に地雷が潜んで無いことを信じて。

「まあ私はおしとやかを自負しているので獰猛なイメージが気に入らないといつのも有りますけど…それより何と言つても嫌なのはマンティコアの『大喰い』のイメージですよ！確かに私の群れには一匹で討伐隊をすべと喰い尽くす猛将もいましたけど…私は少食な方だったのに転生した後と言えばマンティコアと聞いただけで大食い大会にチャレンジしてみないか等と話を持ち掛けてくる輩さえ…」（中略）

はあ…しました。自分の思いを延々と語るマンティコア鳴葉さん。かなり長くなりそうなので耳を傾けるのもそこにして妄想の続きをだな… くへへ… 鳴葉さんにはこれをだな… そんなに赤くならなくとも… この服をきてヨーグルトを口で…（ニヤニヤ）

「…ヒ言ひわけなんですよ、酷くないですか？」

話し終えた後、全てを吐き出したようにスッキリとした顔の鳴葉さん。

「ええ、そうですね、色々苦労されたんですね」

田を「返らし生返事をする俺。

「そうだね、特にマンティコアが転生したって聞いただけで太つてると勘違いしてプロレスのヒール（敵役）にスカウトにきたプロレス団体がいたってのは酷かったねえ。」

ユーは最初から最後まで真面目に聞いていたらしい。

「そうなんですよ。（以下略）」

鳴葉さんの熱弁を聞いていた中に、不意に前方が明るくなり、次第にざわざわとう音も聞こえる。

「…だからして…つと、もう到着ですか… セテ、着きましたよ。ここがルーザンマーダルです。」

話したりなそうな鳴葉さんと『士団の面々が、俺とコーより先にレンガのアーチをくぐる。鳴葉さんは此方を向きて、

「シユウ、黒いお嬢さん、ルーザンマーダルにいらっしゃいませですか！」

微笑み、小首をかしげ、先ほどまでより大分明るい口調で言つ。

ユーが腕からすり抜け、「わおうい！」とよく解らない歓声をあげ、駆け出し、アーチをくぐる、それを追いかけるように、俺も小走りでアーチをくぐり、レンガの一軒家の多い街並みの中に一步、足を踏み入れる。

この一步から始まる、俺達の街での生活、ギルドでの新たな出会いに胸を膨らませながら。

(P・S・ユーも胸を膨らませていたと思うが、胸の大きさが変わつてはいなかつたのは言つまでもない。 残念だ…)

## 到着後・紅竜のお姉さんとの対面

「では皆さん、早々ギルドに報告に行って、酒場で飲みましょう」

鳴葉さんが明るい笑顔で『師団の面々に向かって、声をかける。

「おおおおおっ！」と師団から歓声が上がる。

「今日は大物を仕留めたのですから、〇二小隊の以外にもギルドの中核や、酒好きな仲間達も結構来るでしょう。これからギルドの仲間入りをするのですから、仲間との顔合わせも兼ねてショウモジ一緒にどうですか？」

俺に向かつて微笑みかけて言つ。 じつやら鳴葉さんは笑つて話しかける時、小首をかしげる癖があるようだ。 ふむ… 可愛いじゃないか… じゃなくて。

今は街の外での厳格な様子は窺えず、寧ろはたから見れば明るいムードメーカーのような存在にも見える。

「すいません、あの、大した質問じゃなんですけど… 鳴葉さんの様子が街の外と大分違うような気がするんですけど、いつもみんな感じなんですか？」

「おおおおおっ」と声を上げている『師』のうちの一人、背の高い男に聞いてみたところ。

「そりゃあ、鳴葉ねえは街中じゃあんな感じだよ。街の外じゃある何があるか解らんからなあ」

とのこと。素直に笑つてれば最高に可愛いんだから」「師なんて辞めて俺の嫁になればいいん…いや、でもギャップがあつてこれはこれでイイな…これがギャップ萌えというやつかー（違うか）

「行きますよね？」

俺を急かす鳴葉さん。

自分をジラす俺に、早く入れてと俺を急かす…じゃなくて、返答を急かす。

「俺は勿論いいんですけど、ユーはまだ未成年なんですけど飲み屋とか行つて大丈夫なんですかね？」

一応了解の返答のついでに街に入つてからひとしきり騒いだあとパタンと寝てしまつた、俺の腕の中にいるユーを指差し一応質問。

「大丈夫ですよ。飲酒はダメですが、一応ジュース<sup>スカーフック</sup>スとかもありますし。うちの技術屋も12歳ですけど普通に来ていますし。でもあの娘は普通にお酒飲むので妹さんが真似しないよう気をつけくださいね？」

成る程、一応ユーも連れて行けそうだな。

「解りました。因みに何時頃から打ち上げなのですか？」

因みに今は午前2時だ。今日の午後8時くらいからだらうか？

「今日の今から夜明けまでです。」

「え、でも俺今まで歩いてきて疲れ」

「では行きましょう。これからです、付いてきてください。」

鳴葉さんは、話しを一方的に打ち切り、弓師団の面々に向かつて「皆さんは先に酒場に行つててください。」といい歩きだす。困ったなあ……と思つたところだが、小走りに追いかける。鳴葉さんには今後も振り回されそうだなあ。あとユーニモ。

深夜だからか、余り人がいない（灯りのついている家は何軒かあつた。さつきの弓師団の方々の「うおおおおおっ！」は近所迷惑にはならなかつたのだろうか？）街路を暫く歩くと、窓から電球の光が盛れている大きなレンガ建ての入り口の大きい建物の前に着いた。

「酒場つてここですか？ 随分お洒落つていうか、イメージと違いますね。」

正直な感想を述べる。

「違いますよ。ここはギルドです。それに酒場はもつと賑やかですよ。ふふつ……期待して下さいね」

と開いた木製の門をぐぐりながら鳴葉さん。成る程、と相づちを打ちながら門をくぐる俺。

綺麗に磨かれた大理石の床に踏み入れた2～3秒後…

「あつ！ 鳴葉？ あつかえりーつ！」

明るい声が広い室内に響く。はあ、とため息をつき「帰つたわ」と

鳴葉さん。

「一応報告するから、やあちゃんと記録しなきゃ。」

ローバーの方に歩きながら鳴葉さんが言つ。

「はいはい、まあ鳴葉が無事に帰ってきたんだから成功なんだろ  
一ナジね。りょーかいだよ~」

明るい声の出所には、ルーザンマードルのマネージャーの制服らし  
き服（黒地に赤の端麗なデザイン）を着た、深紅の髪を長く伸ばし、  
深紅の翼を持つた、何て言うか…胸の豊満な、肌以外が全体的に真  
っ赤な女性が、満面の笑みでこちらに手を振つていた。

目を開けたまま睡を飲み、立ち止まる俺。これが噂のギルドマネー  
ジャーか…すごい破壊力だ…（ガクリ）

立ち止つたままの俺を置き去りにして受付まで歩く鳴葉さん。

「第02転生小隊、ボーテイスの転生を完了し、無事帰還です…  
と、空音あんた、こないだ『鳴葉任務成功だよ~』って報告書に  
かいてマスターに怒られたばかりでしょ？ 今日はやあんと書き  
なさいよ。」

と鳴葉さん。ほいほーい、と紅龍のお姉さん。鳴葉さんと俺との会  
話がいかに他人行儀だったかが解る会話。くふつ…泣けるぜ…

静かに干渉していると

「およつ？そりで元お兄さんはどう様かな～？ お前は？」

紅龍のお姉さんからお呼びがかかる。今、ゴーは寝ている。俺の正しい召前を可愛いお姉さんに覚えて貰つチャンスだ！

「あっ、俺ですか？俺は」

「シユウよ。」

「おおこつ…また邪魔が…だが俺は諦めないぜー。」

「う…鳴葉さん…いや、俺の召前は」

「ふえー、シユウっていつんだあ、私は唐草空音からくわくうなだよ。宜しく~」

「この人もか… 紅龍のお姉さん改め、空音さんの中で俺の召前はシユウで認識されてしまつたらしい。へへへ。

と鳴葉さん。ほーとよく解らないう声をだして

「じゅあ空音紹介はあとでだね~。召前もまだとくね~」

とこの召前さん。気の効くお姉さんだな、とか思つてゐ俺にて

「わあ、行け…あ、すこません、行きましょ。」

と鳴葉さん。鳴葉さんが空音さんに話しかける口調のまま言いかけ、訂正する。早く堅苦しい他人行儀から開放されればいいなあ

「謝らなくていいですよ。なんか敬語とか使われると話しがちで」と、思ひてこた俺には好都合だ。

「謝らなくていいですよ。なんか敬語とか使われると話しがちで。タメ口でお願いします。」

する少し驚いた顔をして鳴葉さんは

「え、そういうですか? ……では遠慮なく 改めて直しゃべ、ショコショコ ……」

慣れない様子一度田の挨拶をしたあと、「な、なんか変じやない?」と鳴葉さん。

空音さんと話すときみたいでいいんだけどなあでも、慣れない様子が初々しく田に写る。可愛いなあ …

「じゃ、じゅあ行きましょ。付いてきて。」

と相送わざりす慣れない様子の鳴葉さん。

じゅーまた後でねーつ と手を振る空音さん。  
ギルドを出で、先を歩く鳴葉さんの後ろ、酒場までの道を歩く俺の思ひ事は一つ。

今度こそ俺の正確な本名を覚えて貰いつ事だけだ!

酒場にて・俺が出会った男は大胆な口利ikonだった

「うわーっ いやあ、シユウにいー すつごーい賑やかだねー」

「うわ…よくぞこの短時間で…凄いですね、鳴葉さん」

「ふ、ふふん、これくらいこいつもの事よ…」

上から順に

移動中につきなり目を覚ました、初めての「酒場」にワクワクテカ  
テ力な「ゴー」

正直色々びっくりな「俺」

俺へのタメ口に慣れない様子だが、地味に誇らしげな「鳴葉さん」

ゴーはまだ子供だから、単に「酒場」の賑やかさに驚いているよ  
うだったが、俺は単に騒がしいのに驚いているわけではない。

俺とゴーが鳴葉さんに案内された場所は、「さつきまでいた公園」  
だった。

赤レンガで出来た、アーチ型の入り口や、白濁色のブロック（長方  
形に切り出された石）で囲まれ、同じ素材で出来た噴水などから、  
辛うじて「さつきまでいた公園」と解った

だが、「現在俺がいる公園」はさつきまでの静かな様子とは一変し  
て、所々に設置された100Wの明るい電球、酒樽が積まれ、その

周りでは、弓士服や鎧、ロープなど、多種多様な服装の転生人種、通常人種、入り交じつて、背もたれのある木製の椅子に座り、何個かある、頑丈そうなガツチリした木製の机を囲んで楽しそうに話しながら、ガラスのジョッキに入ったビールを飲んでいる、そんな光景が広がっていた。

「ああ、行こうよ。」

と良い俺の手を引き（ユーも「待つてよ」といながらぴょこぴょこ付いてきた）、小走りに1つのテーブルまで行って、空いている椅子にカタンと音をたてて座り、「シユウも妹さんもどうぞ」と右横の空き椅子を勧めてくれた。

「じゃあ失礼します。」と知らない人ばかりに囲まれている机の前の椅子に座り、なんか肩身狭いなあなんて思ったのもつかの間

「つよーう！ 鳴葉！ 今日はボーティスの転生成功したんだってなあ？ すげーじゃねえかあ！」

響き渡るような声が耳に入る。声の方を見る、声の主はオレンジ色の皿をした同じ年くらいの通常人種の男だった。

「クルヤ、いくら防音結界が張つてあるからといつて騒ぎすぎよ。」

と鳴葉さん。声の主に言つ。すると「クルヤ」と呼ばれた人物はポリポリと頭をかき

「いや～すまんすまん（笑） おつ？ その隣に居るお兄さんは鳴葉の彼氏かな!? ひゅう～！」

などと言い出した。なつ…と言ひ、一瞬赤くなつた、鳴葉さんの顔が険しくなり、殺氣が吹き出す。

「まつ、待て！　冗談だ！　話せば解る！　わつ…　まずはそのサソリの尾をしまつてくれ！」

本氣で慌てる「クルヤ」流石に酒場で死人がではのは和やかじゃないな…

「なつ、鳴葉さん…　まずは落ち着いて！　深呼吸ですよ…　ひ、ひ、ふー…じやなくて、スマセンマジでスマセン…！」

とつあえず止めたがちよつとしたミスから、俺の命まで危なそだ。

死を覚悟する。だが、鳴葉さんはクスッと笑い、殺氣もおさまる。

「ふう…　助かっただぜ、ありがとな兄ちゃん、俺はクルヤ、クルヤ＝マーティクシイヌーもんだ。」

「全くクルヤ…【冗談も程々にしなや】」とブツブツ言つ鳴葉さんをスルーしていう。全く…危ないとこひだつたぜ…　取り合えず挨拶…つと、これつてもしかして俺の本名覚えてもらえるチャンスじやないか…！？

「あつ、俺は」

「あー解つてる解つてる、明日からひひひのギルドに入るショウだろ？」空音さんから聞いたよ（笑）」

「うおおおう…！… 空音さんがどうやらギルドの仲間内には伝えて

しまつたらしき。ギルドの面々は俺の名前を覚えておひがひのは絶望的だ…

「はあ…宜しくお願ひします…」

「ちょっと落り込む…」

「おつあう、俺にはタメで良一って！ 敬語とか使われると…っておおう…？」

俺にタメ口の許可をだした後、椅子にちよこんと座り、ジョッキでコクコクとオレンジジュースを飲むユーを見て、声をあげるクルヤ。暫く固まつたのち、ハアハアと息を荒げる。そのあと、ユーに「ねえお嬢ちゃん」と声をかけ、んん？と返事が帰ってきた後、クルヤの発した言葉は

「ハアハア… お嬢ちゃん… どんなんぱんつまれてるの？…ハアハア」

だった、「ふえ、私今日は」まで言つたユーの口を塞ぎ、「俺の妹になに聞いてんだっ」とクルヤに叫び。

「まあやつ固っこいつなつてえ。」

と言い、ユーのワンピースを捲ろうとするクルヤ。咄嗟にでる俺の右足。クルヤの左足の太ももにヒット。足を払われ、地面に頭を軽く打ち、鼻血をだして気絶するまえに彼が言つた最後の台詞は

「はいてない…！… お嬢ちゃんのあそこを見れただけで俺は… 一生の悔いなしだぜ…」

だった。クルヤの鼻血は地面に頭を打つた衝撃じゃないのかもしれない…

とこつわけで今話の締めの一 句

『ロココン や 鳴呼ロココン や ロココン や ピヨシユウ

## 酒場にて・純白マシンと機械娘の話

「ふう、麦100%（ホップ）のビール、久しぶりに飲みましたよ～、やっぱり美味しいですね。」

大分酒場の雰囲気にも慣れてきて、ユーは楽しそうに笑いながら、周りの人達と話してゐる、俺もそろそろほんの酔いだな、楽しく酒を飲んでいると

ダツダツダツダツ！ ガツ！ ズザア、プシュウ…

大きな音を立て、レンガの街には似合わない、純白の足の長い、全長5～6m位の、近未来的な人型のマシンが酒場に駆け込み、止まつた。純白のマシンの見た目からは想像も出来ない元気な女の子響くような声が聞こえる。

「ふう～間に合つたあ、あ、やつぼー、鳴葉ねえ！ んん？このこちらで見ない顔の人達が明日からうちに入るって言つ、シユウとユーちゃん？ よろしく～」

挨拶された。しかもシユウつて、もつ伝わつてゐし…ていうかユーの名前つて空音さんに教えたつけ？

「ユーヤあつ… かつ… カツコいいんだよ！ よろしくなんだよ～」

皿をキラキラさせて、マシンに挨拶するユー 好奇心丸出しの女子つて可愛いよなあ…

てこうか、「うひ～？」「こいつもギルドのメンバーなのか？」

「鳴葉さん？ ルーザンマーダルのギルドには転生人種と通常人種以外にも機械までいるんですか。すごいですね。」

「ええ、彼女はうちに一人しかいない貴重な『技術者』よ。<sup>メカニック</sup>

「え？ 「一人しかいない技術者」…？ たしかこないだ『技術者』は12歳だ」とか言つていたよな。」

「え、メカニックって12歳の『人間』じゃないんですか？」

という俺の質問に、返答の代わりに鳴葉さんは人工生命体（仮）に向かつていう。

「アルエ、いつまでも入つてないで出てきなさい。」

「いはい」と言い、マシンがガシヨンと音をたて、片膝をつく。

「いやー、入つたままじゃ酒も飲めないもんねー」

プシュうと音をたてて、後ろに縮まるように伸びた頭部がゆっくりと上に開く。

ようと と言つてぴょんとコックピットから出てきたのは、明らかに季節外れの（因みに今は12月だ）灰色のタンクトップにハーフパンツ、その上に白衣一枚という服装の、薄灰色のショートカットヘアの上にゴーグルを付けた、いたずらそうな顔の少女だった。

顔にはススが少しついているものの、充分肌の色が白い事が分かる。

「やつほー、ショウ、ゴーちゃん、初めましてだね、此方アルエ<sup>ルエ</sup><sub>ル</sub>ティアヴァルト、宜しくう！」

と左手を腰に当たし、右手で敬礼をした後、ピッと指を少し前に動かし、にひとつ笑うやいなや、身震いをして、「うへつ…寒う、やつぱりボク着替えてくるね」といつてコックピットに戻ってしまった。

「鳴葉さん、このマシン、あの娘が自分で作ったんですか？」

まあ買つたんだらうけどな、もしそうだつたらびっくりだ。

「はいわいです。」

「マジで！？」

「組み立ては勿論ですが、設計図の製作もアルエです。因みに部品は町工場から特注で作つて貰つてます」

マジかよ…天才技術者ちゃんじやねえかよ… などと話していると

「ちよつー？ ゴーちゃん？ なんでコックピットに入つてんのー？」

噂の天才技術者アルエちゃんの声が聞こえる。

「えへへへ、にやあ お着替え中失礼しまーー」

マシンからゴーのいつも能天氣な声… いつのまに乗り込んだんだ

だ…

「ちよつー？ ビニもわってんの… タメだよおーー」

「ほよほよ、ゴーのよつふにふにしてるのです〜」

アルエの叫び声 いんなり取り、中で何が…ちよつと氣になるぜ…

突如コックピットがパカッと空き、ゴーが転がり出してきて、しりもちをつけ、「えへへ、怒られちゃつた」と笑いながら一言。

立て続けに上半身裸で頬を染め、胸を右腕で隠しているのアルエがコックピットから顔を覗かせ一言

「シユウ…シユウ… その娘危険だよお！ ちゃんと押さえてつ！」

そう言じコックピットの蓋を掴んでバタンと閉めた。

すまんアルエちゃん… ゴーは悪気があつた訳じやないんだ、ただ天然なだけなんだ、許してくれ。

マシンから

「シユウ…シユウ… ちゃんと押さえてよ、 中からメインカメラの映像でちゃんと見えてるんだからね！ ちゃんと押さえてないで、サイククロティクス〇二の二五五mmキャノン砲で酒場」と爆破するからねつ…」

とアルエちゃんの脅し声が聞こえたので（酒場で飲んでいる人は気にせず楽しそうにしていた）、さすがにゴーも大人しくしていたが、一応ゴーを膝の上に乗せて押されておく。

暫くすると、コックピットがゆっくりと開き、巫女服のよつた配色の袖口の広い、羽衣の様な服に、同じ配色のミニスカートに白のハイソソという、上半身だけ中々温かそうな格好で、アルエちゃんが出てきて

「うーさつきはよくもボクの胸を揉んだねつ いつか仕返しちやうからねつ」

と一言、第一声がそれですか… ていうか胸揉んだって… まさかゴーにはGガールズラヴ」の才能が…いやいや、ゴーからは大きくなつたら「お兄ちゃん、私…初めての相手は…お兄ちゃんがいいな…」と言つてもらわねばならんのだからそんなことでは困る、いや、そんなハズは無い！（キリッ）

くふふ…と妄想を広げていると、鳴葉さんが「おや」と言つて

「アルエ、それは神聖な場でのみ着るはずの、グレムリンの正装では？」

と続けた。ん…？ アルエちゃんは通常人種に見えたのだが…

「ん？そーだよ。 だつて酒盛りつて充分神聖じやん？」

と愉快そうに、アルエちゃん。はあ…と呆れたように溜め息をつく鳴葉さん。

「ねえ、アルエちゃんつて転生人種だったの？」

と気になつたので、つい質問。一瞬アルエちゃんの表情が変わった

ので、地雷を踏んだかと焦つたが、怒鳴り声の変わりに彼女の口からでたのは

「やうだよ！ ボクは元々機械の民、グレムリンの族長の娘だったんだよ～ えへん。」

と自信満々に返答。「機械の民」と言つても機械に悪戯してただけでしう。」とちゅつと酔つ払い、毒づく鳴葉さん。「そんな事いうと技術者辞めちやうべつ」とちゅつと怒つたアルHちゃん。

「まあまあ、そんな碧のお姉さんも機械のお姉さんもケンカしないで、今日は眞で楽しむんじやなかつたの？」

ゴーの発言に一瞬ぽかんと場は静まり、そのあとドッキ笑いが起きた。

「ほんのこつものことだよ～（笑）」「キャハハハ、お嬢ちゃん！ 可愛いじゃねえか（笑）」色々な人が口々に言つ。

笑いの中でアルHちゃんが椅子の上に立ち、笑顔で声を張り上げて言つ。

「アルH＝ルディアヴァルト～歳～！ 今日は朝まで飲み明かしまあす～～ 瞳さんお付き合こ下わこシ～～！」

イエヒュッ～～ と起じる歓声、その後、鳴葉さんが立ち上がり、グラスを高く持ち上げ、声をあげる。

「神よ～ 今日もひつして幸せを受けた事を感謝します！ 乾杯つ～～」

かんぱーいっ！…と声が上がる。俺もゴーも「乾杯！…」と叫ぶ。  
さあ、今宵の宴は始まつたばかりだぜ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3859z/>

---

幻獣ぱれっと!

2011年12月20日23時46分発行